

今年（2020）の春に懐かしい食品の話をしました。これから2回に分けて家庭の救急箱、家庭常備薬の話をしていきます。今年、新型コロナウイルスをきっかけにして、改めて、日本の衛生環境の改善と薬の進歩に感謝しました。そこで、昔の汲取式トイレ、防火用水があった、蠅、蚊に悩まされていた風景と、その当時の懐かしい薬を話したいと思います。

薬は中学校から好きだった。薬とは生物と化学の学問”生化学”そのものです。化学構造式を想像しながら服用します。体内のどこで、どんな反応して治癒していくのか？思い巡らすのも精神的な薬効だと思います。登場する薬は主に昭和30～50年代、西暦にしたら1955-1965年に我家の救急箱にあったものです。分量が多くなったので2回に分けて発信します。

## 1.虫刺されと虫下し

昔はよく虫に刺された。その頃（1960年代）、まだ下水の側溝や防火用水や水溜りが町のあちこちにあって、濁った水の中にボウフラが湧いて、蚊が多かった。さらに、イトミミズ、ヤゴ、タガメ、ゲンゴロウ、メダカ、フナもいて、子供の遊び場であった。時に、自宅の金魚を防火用水に放流して、それが大きくなり、巨大化した出目金がユラユラ泳いで水中の虫を食べるジオラマパークであった。自然科学を勉強する生きた教材だった。私はプランクトンネットを作って水中の微生物を捕獲後、家で飼育して顕微鏡で覗いていた。



あの蒸し暑い夏は、勿論、エアコンなんかなく団扇、扇風機と氷屋がして体を冷やした。寝る時は蚊取り線香をつけて、アルミの洗濯バサミで2時間ぐらいの長さのところを

つまんで寝た。まだ体が小さい幼稚園の頃には蚊帳つりの中で寝た記憶があるが、小学校の頃はなかった。あの頃は殺虫剤スプレーがあつて。布団を敷いて寝る前、10分前に寝室に殺虫スプレーを撒いた。学習机の下とか、床の間の隅のいかにも蚊が潜んでいそうなところに撒いた。薬剤が畳に落ちたころ、ようやく布団を敷く。寝ているときに”ブーン”と来ると、もう寝られない。蛍光灯をつけて、見つけるまで粘った。小学校でよく、「昨日は蚊が出て、寝不足だ」の声が聞こえた。火を使う蚊取り線香が電子式ベープに代わり便利になったが、薬剤が出ているのか？無いのか？無視無臭でハッキリしない。

蚊やアブに刺されて腫れると、キンカンを塗った。あの独特な瓶。茶色の瓶に頭に白色のゴムのスポンジが中にある蓋がついているもの。現物を見ないと想像できない。アンモニア臭がある揮発性の透明な液体で、けっこうむせたし、滲みた。薄い粘膜のところにつけると飛び上がる。やがて、現在も定番のムヒやウナクールがかゆみがある虫刺されの定番になった。ムヒSはチューブ式の軟膏タイプで、その後容器の頭にスポンジがついた液体ムヒが定番になった。今も目の前にある。

虫下しとは回虫の事です。今となつては死語のようですが、昭和30年代には、まだお腹に虫を飼っている人がいた。回虫は理科室にホルマリン漬けの標本でみた。普通は3～6cmぐらいの白いミミズみたいな形だが、サナダムシは10m(小腸7mと大腸1.5mの合計よりも長い)にもなり、強力な口で腸に穴を開け出血する。聞いただけでも身震いする。回虫の有無は検便で調べた。ポキール(ぎょう虫検査)は名刺大の青い粘着フィルムで、これを肛門につけて、回虫の卵の有無をみる。検便も

あった。マッチ箱のような箱に入れて出した。今から思うとかなり原始的な方法だった。

回虫の原因は、やはり食の衛生がまだよくなかった。魚のアニキサスも、有機肥料で育てた野菜に回虫の卵がついていたり、至る所から体に侵入する機会があった。今は回虫の話は全く聞かない。反対に回虫が体の免疫を強くする話がある。花粉症は回虫が居なくなったから多くなったとか、。信じないが、あまり除菌、殺菌に夢中になると体に有益な害虫（菌、ウイルス、虫）に対する耐性がなくなってしまうのも現代病である。妻は潔癖症、私は雑菌とともに生きる派です。

### 殺虫剤

1910年スイス人が除虫菊の有効成分が殺虫効果があり動物に無害であることを発見。粉末を農薬とした。

### 蚊取り線香

1890年（明治23年）に大日本除虫菊（金鳥）創業者の上山英一郎が、江戸時代以来の「蚊遣り火」に除虫菊を応用した蚊取線香を発明した。

### キンカン



1930年発売、アンモニア水と1-メントールを含む金冠堂の外用薬。虫毒の蟻酸をアンモニアのアルカリで中和する。

### ムヒ

富山県の株式会社池田模範堂の製品。かゆみ止め外用剤「ムヒ」は1926年から製造されている。

## 2.戦後のDDT

虫刺されの思い出の以前の話です。私も記憶が曖昧な幼稚園（昭和35年頃まで）の頃、家にDDTの噴霧器があった。まだノミやシラミがいたのか？さされた記憶はないが、これを体に掛けた記憶がちょっとあるような無いような。生まれたのが昭和32年（1957年）だから、終戦後12年が経過している。



さすがにDDTは終

わっていた。TVで戦後の日本の映像の中に出てくるシーンを錯覚体験した記憶なんだろう。幼稚園の頃のお祭りに、手足が無い傷痍軍人がアコーディオンを演奏して募金をつのっていた。あの頃は白い服と戦闘帽をかぶった兵隊さんを見ると怖かった。DDTは第二次大戦で日本から除虫菊が輸入できなくて米国で開発した殺虫剤である事を後に知った。米軍は戦地の死体の腐敗や野営地の疫病対策として大量に散布した。この流れで、戦後の日本の公衆衛生に使った。

### DDT

1873年オーストリア化学者が合成し、1939年スイス人が殺虫効果を確認しノーベル化学賞。第二次世界大戦によって日本の除虫菊の供給が途絶えたアメリカによって大量生産した。アメリカ軍は1944年9月から10月のペリリューの戦いで戦死体や排泄物にわくハエ退治のためにDDTを初めて戦場に散布した。

### 3. 蠅が多かった

一軒家の社宅の小学校まではかなり蠅が多かった。中学時代、コンクリート建ての3Fの社宅(1970年、大阪万博の年)に入ってから高さもあって蚊や蠅は少なくなった。蠅が多い理由はまだ汲取式トイレや家畜小屋(豚、鳥、牛)がたくさんあったから。たしかに汲取式トイレの中を懐中電灯で見ると白いウジがいた。これが孵化して蠅になるなら、やっぱり数は多い。通学路の途中に豚、牛小屋があって牛糞の山があった。1960年始めには、養豚業者がリヤカーで生ゴミを回収して豚の餌にしていた。穴ぼこだけの土の路をリヤカーを引いて回収する風景があった。

覚えているのは学校から500m離れた農家の軒先に牛小屋があった。恐る恐る大きな牛の側までよって牛タッチできた子が勇気がある子だった。畑には肥溜めがあり、栄養タップリの熟した家畜の糞を畑に撒いていた。こんな環境だから当然蠅も多い。天井からハエ取り紙(粘着式テープ)を垂らして蠅がくっついてものがき苦しむ様子を熱心に眺めていた。ハエ取りのガラスチューブは学校で使った。天井にいる蠅を殺すのはやっぱり殺虫スプレーが一番。各社から、毎年夏には新製品がでる一大マーケットであった。「狙ったアイツを逃さない、強力噴射ジェットノズル」。今、新興国の露天の風景を見ると蠅がたかっている食品を食べている風景がある。今はゾッとするが、小学校ぐらいまでは、あそこまでの

蠅の数ではないが、多少接触したぐらいなら全然平気に口にしていた。ちゃぶ台の上におく小さい折りたたみ式 蠅網を使っていた。冷蔵庫が普及するまでは食品を虫から守る最後の砦であった。

コンクリのマンションの3Fは、大きな蠅はいなかったが台所の三角コーナーによくショウジョウバエが湧いて、その小さいコバエが鬱陶しい。ショウジョウバエは遺伝学の研究に使う生物です。遺伝によって目の色や羽の大きさや形に差ができ、蠅なので世代交代が短時間なので実験動物として適していた。そんな生物の本を読んでいたが、手元にある光学顕微鏡では遺伝子は見えない。コバエを捕まえて虫眼鏡で見るのが限界。専門書の写真をみながら遺伝子工学の走りをかじっていた。

### 4. 家蜘蛛、ゴキブリと蛾

一軒家の社宅に居るころ、時々大きさ10cmぐらいの家蜘蛛(アシダカグモ)が音もなく天井や柱を這っていた。幸い煤図かずおの漫画のように家中、蜘蛛の巣だらけにはならなかった。夜に出くわすとドキッとす。一説によるとこれは家の主で、蠅等の害虫を食べるので益虫だから殺しては駄目という。そうは言ってもこんな蜘蛛が寝ている顔に落ちてきたら一大事。殺虫剤でご臨終となつてもらう。敵もすばしっこい、スプレー缶をとつてく間に居なくなると大騒ぎ、探し回る。

同じく、ゴキブリもよく出た。ゴキブリは台所を中心に冷蔵庫や食器戸棚の裏でガサガサする。新聞紙を丸めて叩き潰す。姉が大嫌いで、発見すると、キャーキャー叫んで、「豊、やっつけて」と命令された。家具の隙間に逃げ込んだらスプレー攻撃しか手はない。冷蔵庫の後ろでご臨終なら、もう死骸は



ハエ取り紙 と



蠅網

回収できない。頻繁に目撃するとゴキブリホイホイを仕掛け、数日おいて回収する。かかっていると嬉しい。なんでも餌に工夫があつてゴキブリが好んで食べに来ると宣伝にあつた。こうして、ゴキブリや蜘蛛、時にカミキリムシ、ダンゴムシと戦った昭和の一軒家であつた。地面が近いと色々な生き物が家に侵入してきて楽しかつた。

一軒家の周りにはマサキ(常緑樹)の生け垣があり、毎年夏に剪定しないとボーボーに伸びてしまう。そして生け垣はもちろん子供の遊び場でもあつた。あの当時は秋に木々の葉が落ちると葉っぱを掃除して道路で焚き火も自由にやっていた。時々、年によって違うが、マサキに毛虫が大発生する。大きくはないが、数がすごいから気持ち悪い。やがて蛹になつて孵化すると体長3cmぐらいのチョッチョ(蛾の方言、ユウマダラエダシヤク)になる。これもまた数が多い。ある年に、手を焼いた社宅管理者が集めたチョッチョの数で小遣いをくれるイベントがあつた。子供なりに沢山集めてビニール袋に詰めた思い出がある。同じ種類の植物を生け垣し、時に虫の食草が合致してしまうと、何かの拍子で特定の虫が大発生してしまう。

## 5.ネズミ退治と友達の爬虫類

確かに、日本軽金属の一軒家の社宅にネズミがいた。三保半島の日本軽金属社宅の敷地は大きく、直径1kmぐらいの面積があり、そこが白浜町となつていて、この中にスーパー、銭湯、プール、図書館、集会所があつた。昭和40年(1965年)まではすべて一戸建ての家が並んでいたが、40年以後、一戸建てを潰して鉄筋コンクリートのアパートに切り替わつて、空いた土地を他社(日本鋼管や中部電力)に売却して段々、遊べる広場が狭くなつた。鼠や

爬虫類達は一戸建ての社宅に訪問してくる迷惑な客人であつた。

天井をドタドタを走り回る音がする。なかなか姿はみない。家の前には下水の側溝があつて、そこが移動路のようだ。ある時、ここにネズミ捕りのカゴを仕掛けて1匹捕まえた。水攻めで殺して、庭の一角を掘って埋めた。この時、初めて哺乳類の殺害に手を染め、ちょっと大人になつた。

ヤモリが出た。クリーム色の15cmぐらい、手の指紋が吸盤状になつて土壁を這っていた。とても可愛く興味深い。悪いことはしない、オトナシイ。いつの間にかいなくなつた。イモリは水辺にいる腹が赤い奴で、この子も可愛い。



積極的に家で飼つたのがトカゲやアマガエル。小学生の頃はよく庭にいた。茶色の15~20cmぐらいの日本トカゲ。尻尾が青緑に光るキレイなトカゲ(虹色トカゲ)は宝石のよう。網で捕まえて透明なプラスチックの水槽に入れてしばらく飼育する。自分だけのミニ動物園を作る。餌は蠅、ダンゴムシ、ミミズ。家の女性陣には非難されました。絶対に逃げ出さないことをお約束した。

## 6.擦り傷、切り傷の薬

子供の頃ですから、特に夏は、半ズボン、半袖で外で遊び回り、擦り傷は年中体のアチラコチラにありました。まずは水道水で傷口をキレイに洗って、オキシドールで消毒します。過酸化水素とタンパク質が反応して酸素の泡がブクブク出ます。滲みます、痛いです。泡がでるほどバイキンを滅菌している気がしま

す。鼻紙で水気を取り、次は赤チンを塗ります。バンドエイドはまだありません。ガーゼをはさみで切って、テープでバツテンに止めます。防水ではないから水にふれるとガーゼが濡れて厄介です。そんな時はビニール袋を切って、腕に巻いて紐で止めて水仕事をしました。赤チンはマーキュリークロムが正式名で、水銀（英語でマーキュリー、元素記号Hg）が入っています。空気に触れるとブロンジングと言って金属光沢の干渉光が光ってキレイ。やがて血が固まってかさぶたになり、剥がしたい気持ちを抑えて自然落下を待ちます。カサブタが落ちるころ、傷は癒え完治します。厄介なのが、膿んだ時です。黄色い粘液（白血球と細菌の死骸）が出るとベタベタして気持ち悪い。今、生体反応を勉強したので膿の正体がわかって尊敬しますが、子供のころは膿が出るととってもブルーでした。

やがて赤チンが水銀の公害問題の影響で姿を消して、代わりにヨードチンキをよく使った。これも肌が茶色になる。アルコールが入っているのでちょっとスースーする。透明なアルコール消毒が一般化する前はこのヨードチンキが治療室で多用していた。注射をするときの消毒、切り傷の消毒、手術の切開前の消毒、等々茶色のシミが体のあちこちにできていた。

家庭用ではマキロンの液体が出てきて、オキシドールや赤チンやヨードチンキと交代した。滲まないし、色もつかない。透明の水のよう。マキロンで傷口を殺菌して、オロナインH軟膏を塗って、その頃にはカットバンを貼って、おしまい。一方、医者を使う消毒は皮膚への刺激が強いヨードチンキからマイルドなイソジンの成分であるポビドンヨードに変わったのは誰も知らない。

## 赤チン（マーキュリークロム）

1918年に殺菌作用が見つかった。日本では、製造工程で水銀が発生するという理由から1973年頃に製造が中止された。マーキュリーが水銀の英語名、クロムchromは色の彩度を意味する。

## ヨードチンキ

チンキ剤の意味は「生薬をエタノールに浸したものの」の総称。ヨウ素のアルコール溶液のこと。



赤チン と ヨードチンキ

## オキシドール

過酸化水素とタンパク質が接触して水と酸素の泡が出る。

## オロナインH軟膏

アメリカのオロナイトケミカル社からライセンス契約。スペイン語でオロは黄金。当初、成分が9つあったのでオロナイン。1953年発売

## マキロン

三共製薬が1971年に発売。殺菌作用の塩化ベンゼトニウムを含む。マーキュリークロムからマキロを取り、語尾にンをつけた名前。

## 7.汗も、ニキビ

夏に苦しんだ湿疹に汗もがある。それほど酷いカブレではないが、首筋や脇の下あたりにブツブツと薄い赤い湿疹ができる。やっか

いだ。そんな時、小学校低学年までシッカロールを風呂上がりに塗った。湯上がり直後はまだ汗が引いていないから、十分に水気を取ったあとにシッカロールを塗る。塗る道具が女性のファウンデーションを塗るパタパタと同じなので、お化粧気分でパタパタした。首から顎まで真っ白。それがおかしくて、調子に乗る。小学校高学年頃にはもう姿を消してしまった。

中学生になるとニキビができる。お年頃の印だ。ほっておくと頂上が白い膿がたまる。これを潰したいが、そうすると跡が残ると言う。膿ができるということは皮脂を栄養源にしているアクネ菌と白血球戦った結果である。自然に任せるのが一番。消えてはできてを繰り返し、20歳ぐらいに自然に収まった。当時はニキビ用の薬もなくオロナインH軟膏を塗っておくのが関の山であった。大人になってからニキビ用の薬としてクレアラシルなるブランドを知った。

#### シッカロール

またはベビーパウダー。滑石（タルク）などの鉱物と、コーンスターチなど植物のデンプン。シッカロールはラテン語で「乾燥」という意味の「シッカチオ (siccātiō)」から名付けられた。

### 8.胃腸薬は大人の薬

胃腸薬を子供の頃飲んだか？と聞かれたら、NO、滅多にお世話にならなかった。特に、胃薬は食べすぎ、飲みすぎの大人の薬。子供に食べすぎで胃の消化不良はない。昭和30~40年の食べ物だから、バターや生クリームたっぷりのお菓子もなかった。地方都市の三保半島にはマクドナルドもケンタッキーもミスタードーナツもない健全な食生活でし

た。胃の薬を飲んだのは口角に亀裂が入って痛みが出る「口角炎」の時です。昔はこれが食べすぎで胃が悪くなると出ると思っていた。胃薬を飲んだ。両親がそう思っていた。今、調べると”さまざまな原因があります。なかでも多いのは、乾燥、細菌、ウイルスによる感染と書いてあった。食べすぎが原因ではなかった。この事を知ったのは40歳過ぎたころ。子供のころ、家庭で習慣になっていた事を覆すのは時間がかかります。

父は胃腸があまり丈夫でなかったのか、よく胃腸薬を飲んでいた。昭和30年代の薬箱には熊の胆、百草丸が、40年代になると今でも市販している太田胃散、三共胃腸薬、キャベジンが入っていた。熊の胆は本当にクマの胆汁を固めたもの？相当に苦い記憶がある。一度経験すれば2度と御免です。

胃薬よりもよく服用したのが腹痛、下痢、冷たいものの多飲でお腹がゆるくなったときに征露丸とビオフェルミンです。征露丸はあの匂いと色で、いかにも効きそうです。下痢が酷い時は征露丸、ちよつとの時はビオフェルミンでした。ビオフェルミンは薬なのかサプリメントなのかよくわかりません。3粒を嚙んで飲み込みます。昭和30~50年はまだ食品の保存技術（冷凍技術と流通や食品添加物）が良くなく、時期になると食中毒のニュースがよくあった。子供は免疫が無いので色々なものを食べて、お腹を壊しながら強くなっていった。

#### 熊の胆

材料は、クマの胆嚢(たんのう)であり、乾燥させて造られる。(オエツ)



熊の胆 と 百草丸 はどちらも苦い

### 百草丸

木曾御嶽山の修験者がキハダの内皮を煎じて薬とすることを村人に伝えたのが始まり。

### 正露丸(日局木クレオソート)

木材の熱分解されて生成したフェノール類化合物を主成分とする化学混合物。creosote=英語で殺菌、防腐剤

### ビオフィェルミン

ビフィズス菌は1899年、パスツール研究所で乳児の糞便中より発見された。V字やY字に分岐した特徴的な形より、ラテン語で「二又の」を表すビフィドゥスbifidusという語が採用された。その他に乳酸菌、決明子（ケツメイシ）、ジメチルポリシロキサンを含む。

### 太田胃散

1879年（M12年）日本橋区で太田信義（初代）が「雪湖堂」として創業。肉食中心の欧米人の食文化に適応する胃腸薬として開発した漢方薬。

### 三共胃腸薬

1899年設立。「三共」という名称は創業者である高峰、西村と福井の三人が共同出資したことになむ。高峰 譲吉は消化酵素のタカジアスターゼの発見者で、この成分を含む胃腸薬。

ここまで読んで頂き、感謝します。私が医薬品と薬効の生化学が好きなので深入りしてしまいました。上巻おわり。